

【文書 03】

公開シンポジウム「釈尊はどのような生活をされていたか  
ーースマナサーラ長老とともに考える」基調報告

森 章司 (2002.12.13)

【1】 中国暦と太陽暦と現代暦（グレゴリオ暦）との対応

【2】 釈尊と仏弟子たちの3つの生活パターン

【3】 普段の生活

- [1] 生活の基本
- [2] 普段の生活の期間
- [3] 衣
- [4] 食
- [5] 住
- [6] 陳棄菜
- [7] 1日の生活の時間帯
- [8] 修行

【4】 サンガの行事その他

- [1] 毎月の行事
- [2] 毎年の行事
- [3] 比丘と比丘尼の関係

【5】 雨期（*vassāvāsa*）の生活

- [1] 雨安居の制が定められた理由
- [2] 雨安居の期間
- [3] 雨期の食料事情
- [4] いまごろ安居地に入ったか
- [5] 雨安居地の決定
- [6] いまごろ安居地を出たか
- [7] 雨安居が過ごされた場所
- [8] 雨安居の生活
- [9] 集団生活か個人生活か

【6】 遊行（長期の *cārika*）の生活

- [1] 遊行が定められた理由
- [2] 遊行の目的
- [3] 遊行はどの時期に行われたか
- [4] 遊行の交通手段
- [5] 宿泊場所
- [6] 遊行の人数
- [7] 1日の遊行距離
- [8] 遊行期間と移動距離
- [9] 遊行中の生活
- [10] 遊行の経路

【7】 釈尊と弟子たちの生活周期（おおよその目処）

【8】 まとめ

## 【1】中国暦と太陽暦と現代暦（グレゴリオ暦）との対応

日本の仏教ではさまざまな行事を古い中国の暦（下の表に薄い網を入れた部分です）にしたがって行っています。しかしこのシンポジウムでは現代の暦（濃い網を入れた部分です）にしたがって進めたいと思います。

月名・黑白分		中国暦	仏教関係	太陽暦	現代暦	四時	三時
caitra	白分1～15日	1/1～15				春	熱時
vaiśākha	黒分1～15日	1/16～30		3月	4月		
	白分1～15日	2/1～15	2/8、2/15 釈尊入滅他	3/21春分			
jyeṣṭha	黒分1～15日	2/16～30		4月	5月		
	白分1～15日	3/1～15					
āṣāḍha	黒分1～15日	3/16～30		5月	6月	夏	
	白分1～15日	4/1～15					
śrāvaṇa	黒分1～15日	4/16～30	4/16 入雨安居	6月	7月	夏	
	白分1～15日	5/1～15		6/22夏至			
bhādrapada	黒分1～15日	5/16～30		7月	8月		
	白分1～15日	6/1～15					
āśvina	黒分1～15日	6/16～30		8月	9月		雨時
	白分1～15日	7/1～15	7/15自恣				
kārttika	黒分1～15日	7/16～30	7/16 迦絺那衣	9月	10月	秋	
	白分1～15日	8/1～15		9/23秋分			
mārgaśīrṣa	黒分1～15日	8/16～30		10月	11月		
	白分1～15日	9/1～15					
pauṣa	黒分1～15日	9/16～30		11月	12月		
	白分1～15日	10/1～15					
māgha	黒分1～15日	10/16～30		12月	1月	冬	寒時
	白分1～15日	11/1～15		12/22 冬至			
phālguna	黒分1～15日	11/16～30		1月	2月		
	白分1～15日	12/1～15					
caitra	黒分1～15日	12/16～30		2月	3月		

## 【2】 釈尊と仏弟子たちの3つの生活パターン

釈尊と仏弟子たちの生活パターンは大きく分けると次の三つになると思います。

- (1) 普段の生活
- (2) 雨期の生活（雨安居）
- (3) 遊行の生活

以下に、原始仏教聖典から汲み取ることのできる、この3つの生活を中心にご報告します。

なお釈尊は成道後の45年間を衆生教化に尽くされました。その間にはその生活ぶりも変化がありました。ここでは「律藏」がまとまった後の、時期的に言えば釈尊の最晩年の生活をイメージしています。

## 【3】 普段の生活

### [1] 生活の基本

比丘の生活の基本は、以下の四依法（*cattāro nissayā*）と定められています。

- ①食は乞食こつじき（*piṇḍiyālopa-bhojana*）
- ②衣は糞掃衣ふんぞうえ（*paṃsukūla-cīvara*）
- ③住は樹下坐（*rukkhamūla-senāsana*）
- ④菓は陳棄菓ちんきやく（*pūtimutta-bhesajja*）

しかし釈尊は、提婆達多（Devadatta）がこのような厳格な生活を生涯を通して行うべきだと提案（5法＝一生涯林住、乞食、糞掃衣、樹下坐、不食魚肉）したのに対して、これを拒否されました。むしろ雨期中の樹下坐を禁じられています。この四依法はできる時にできる人がやればよいという考えで、このような生活法を遵守しようとする人は頭陀行者と呼ばれました。釈尊を含めて一般の仏弟子たちは年間を通して上記のような生活をされていたわけではありません。むしろ当時の一般大衆の生活方法を想像した方が間違いがないと思います。

### [2] 普段の生活の期間

「普段の生活」というのは、雨期中の「雨安居」と「遊行ゆぎょう」を除く期間の生活を指しますが、期間が定められているのは「雨安居」だけで、普段の生活と遊行の期間は定められているわけではありません。また雨安居も遊行も普段の生活の延長で、むしろ特別に取りだすのは適当ではないかもしれません。後に述べる「遊行」の生活は1カ月から2カ月くらいの長期のものをイメージして申し上げますが、1、2週間の短期の遊行は普段の生活の中で普通に行われていたと思います。

### [3] 衣

衣食住の全ては、在家信者の寄進に頼っておりました。キリスト教の修道院のように、自給自足が原則ではありませんでした。

衣服については、釈尊も糞掃衣ではなく、こざっぱりとした身なりをされていたと思います。摩訶迦葉 (Mahākassapa) は糞掃衣を常用しており「頭陀第一」と呼ばれています。だからむしろこの方が例外であったことが分かります。また釈尊は年取った身に糞掃衣は重かろうというので、摩訶迦葉の糞掃衣とご自分の衣と交換されようと思いました。以前摩訶迦葉は自分の上等の衣と釈尊の質素な衣を交換したことがあり、摩訶迦葉はそれ以来をそれを着続けていたという伝承があるのです。これもむしろ釈尊はこざっぱりした身なりをされていたことを証明します。

また寒いのに薄着を通せといった精神主義ではありませんでした。寒ければ暖かいものを着、暑ければ脱ぐという合理的な姿勢でした。しかし裸は禁止されていました。

衣にする布地は樹皮・毛皮は禁止されていましたが、絹織物、毛織物などの素材も許されていました。当時の絹は蚕が繭を破って外に出たあとを使っていたようで、したがって殺生はしていなかったからのようです。しかし寒いところでは革のサンダルとか、毛皮の尻当てなども許されていました。

南方仏教のお坊さんはオレンジ色の衣を着ていますが、釈尊時代のお坊さんたちがこの色を着ていたのかどうかは分かりません。むしろ青色 (nīla)、泥色 (kaddama)、黒褐色 (kālasāma) というくすんだ色だったのではないかと思います。律蔵によれば、袈裟の原語である kāsāya あるいは kāsāva は「中間色のくすんだ色」と定義されています。しかしインド語としての kāsāya は赤褐色を意味するようです。南方仏教には釈尊の肌色は金色であったので、どんな色の衣を着ても金色に染まるのだという伝承があります。

衣には3種類あって、下衣 (antaravāsaka) ・上衣 (uttarāsāṅga) ・重衣 (saṅghāṭi、外衣) と呼ばれます。全て四角い布ですが、布自体の価値を失わせるためにわざわざ裁断して、大小の布片にしたものを縫い合わせて作ってあります。いわばパッチ・ワークしてあるわけです。日本でも五条袈裟とか、七条袈裟とかいいますが、縫い合わせて五条とか七条にするからです。

下衣は腰巻き、上衣は上着で、普通はこの2種類の衣を着て生活します。重衣はオーバーのようなもので、普段は左肩にかけており、寒いときや夜寝るときの掛け布団の代わりになりました。これ以上の衣を持つことは禁止されていました。帯も許されています。

右肩を出す着方は「偏袒右肩」といいますが尊敬を表す印で、普通は「通肩」といい、両肩を覆って着ていました。現在の南方仏教では、そのTPOは国によって多少の違いがあるようです。

サンダルを履くことも許されていました。しかし乞食のために村に入るときには裸足です。

頭髪やヒゲを伸ばすことは禁じられていました。しかし頭髪は2ヶ月間あるいは2指 (aṅgula 2指は約4センチ) の長さまで伸ばすことは許されていました。仏様も出家ですので剃頭のはずですが、仏像には螺髪があります。この範囲だったのかもかもしれません。

#### [4] 食

釈尊が畑仕事をして、自分でお米や麦や野菜を作られるということはありませんでした。また経済行為をすることは禁じられていました。しかし近くに在家信者がいて、代行することは許されています。

調理が禁止されていたわけではありません (一旦禁止されたが、飢饉の時に許された)。サンガや供養 (cetiya-pūjāya) のための調理も許されておりました。しかし食事を自分で調理することは余りなかったと思います。食を得る方法としては乞食が理想でした。調理された食べ

物をもらうわけです。このほかに、在家者の家にお呼ばれするとか、料理が僧院に出前されるなども許されていました。僧院の中で在家信者が調理して、お坊さんに食事を供するということも行われました。

食事は健康を維持し、修行に差し障らない程度に節制されました。決して断食などの苦行が奨励されていたわけではありません。

1日1食が原則でしたが、男性の比丘は午前中は残り物があれば複数回食事をするのが許されていました（比丘尼は禁止されていました）。おそらく普通は、早朝にお粥（yāgu）程度の軽い食事をして、正午前に正餐を取ったのだと思います。食事は午前中に取らなければならないと定められていました。しかし砂糖水やジュースなどは、薬として午後にも飲むことができました。

食事は個人の所得でしたから、10人前後くらいの小さなサンガなら、サンガの人たちが一緒に食事をしたと思いますが、原則としては各個ばらばらに食事しました。乞食に出た場合は、出先の道路端などで食事をする場合もありましたし、僧院に持って帰って食堂で食事をする場合もありました。その場合でも他の比丘を待つという必要はありませんでした。もし残れば、他の比丘に上げるのが習慣でした。そして最後の人が食べて、それでも残り物があれば捨てました。翌日のために取っておくということは禁じられています。

食材としてのタブーはほとんどありませんでした。肉食も禁止されていたわけではありません。ただし自分のために殺されたとわかる場合は食べてはならないとされていました。現在インド人は牛肉と豚肉を食べませんが、釈尊は食されました。しかし人肉はもちろん象・馬・犬・蛇・ライオン・虎・豹・熊の肉など特殊な肉は禁止されていました。ニンニクやニラなどの匂いのする食べ物も禁止されていました。ただし病気の場合や調理されたものの中に混じっている場合はその限りではありません。もちろん飲酒は禁止です。

どういふふうに料理された食べ物を食べておられたかはよく分かりません。主食は米の飯で、ナンやチャパティの類もあったようです。sūpa (P., Skt.) という語が有り、文字通りスープを意味しますが、これがカレーに当たるかもしれません。しかし唐辛子は16世紀になってからインドに入った新しい食材ですから、釈尊時代のカレーはそんなに辛くなかったのではないかと思います。しかし胡椒はインドが原産地であるとされています。米や麦を挽いて団子状にした食べ物（餅 pūva, piṭṭhakhāṇiya）や粉をバターで溶いた「むぎこがし」（mantha）のような食べ物もありました。餅は贈り物のための食べ物、むぎこがしは旅行中の糧食であったようです。

食物を入れる鉢は鉄とか瀬戸物で作ります。木製や石製のものは禁止されています。ひびが入ったりすると修理して使ったようですから、おそらく金属製が普通だったのだと思います。直径30センチくらいの上のすぼまったbowl状（仏前で読経する際に使う鈴のような形）をしていたのではないかと思います。これにはフタがついていませんから、食物を入れたときには外衣で埃が入らないように覆います。

鉢にはご飯物もおかずも一緒くたに入れました。もともとカレーならこのようにして食べるのですから、あまり不都合はなかったかもしれません。鉢は食器でもありますから、ここから直接食べ物を五本の指で丸めて食べました。もちろんスプーンや箸は使いません。大口を空けて食べないとか、チャプチャプスルスル音をさせて食べない、おいしいものだけを先に食べてはならない、というようなマナーがありました。

旅をするときには水をもって歩かなければならないことになっていましたので、このほかに水瓶 (pāṇiyathāḷaka) が使われたと思います。飲用のほかにも、手を洗うときなどにも用いられました。水を酌むときには虫が入らないように漉し布 (parissāvana) が使われました。虫と一緒に飲み込んで殺生するのを防ぐためです。

#### [5] 住

釈尊の時代にも祇園精舎や竹林精舎などの多くの僧院が建築されました。したがって普段は僧院で生活しました。しかし一人で静かな阿蘭若あらんにゃ (arañña) に住する者もありました。ただし比丘尼は阿蘭若に住することは禁じられています。

比丘尼の僧院は町中にありましたが、比丘の僧院は町や村の近くの静かなところに作られました。しかし牛車で行って、牛車がUターンできる所でなければならぬと定められています。僧院は人々が気軽に出入りできるということが原則になっているわけです。キリスト教の修道院のように、世間から隔離されているわけではありませんでした。

日本では深山幽谷で仙人のように暮らす隠遁者が尊敬される傾向がありますが、釈尊時代はむしろ、一人山の中で修行する者 (paccekabuddha 独覚、縁覚という) は敬して遠ざけられるような傾向にありました。したがって釈尊を含めて比丘のほとんどは集団生活をしておりました。静かな場所を意味する阿蘭若も、人里離れた場所ではなく、僧院のそばにある静かな場所を意味しました。

僧院は最初は粗末な木の小屋でありましたが、後に石あるいは日干しレンガ、泥を石灰で固めた建物などが造られるようになりました。壁の色は白か、黒か、赤く塗られました。2階建てもありましたし、尖塔のついたものもありました。洞窟も許されましたが、釈尊の活動された地域では、王舎城近辺を除くとこれに適した場所はありません。ヒンドゥスタン平野のど真ん中で、真っ平らな土地ばかりだからです。

大きな僧院には、坐禅などをする勤行堂 (講堂)、お坊さんの個室としての僧房、食堂、殿堂 (重閣 pāsāda)、布薩や会議をする集会堂、倉庫 (蔵倉)、裁縫室 (迦絺那堂)、経行堂などの施設がありました。

居住区域から少し離れたところにトイレ (廁堂) が作られました。男の比丘も立っておしっこすることは禁じられています。

井戸のある水屋 (水堂) やお風呂 (火堂) がありました。お風呂はバスタブ式のお湯をはるお風呂ではなく、サウナ形式のものではなかったかと思います。しかし普段は水浴びでした。サウナはむしろ病氣治療のために使われたのでしょうか。

もちろん小さな村のお寺は、民家に毛の生えたようなものだったと思います。

お坊さんの住む僧房は、個室の場合は最大 8 畳 (奥行 12sugatavidatthiyā、幅 = 7sugatavidatthiyā) くらいと定められていました。インド・パキスタンに残されている僧院遺跡の僧房の大きさは、私の計測したかぎり 6 畳より大きなものはありません。しかし大勢のお坊さんが共同で住む大部屋もありました。遊行中に僧院に宿泊するときには、法臘順に部屋が割り振られました。お坊さんの数に比して部屋数が少ない場合は、もちろん相部屋になります。個人所有の僧院もありましたが、原則として僧院など固定資産は、地上に存在するお坊さん皆なの共有財産ですから、誰でも使用できるというのが原則です。

部屋の中には木や竹で作ったベッド (mañca) や椅子 (piṭha) が置いてありました。備え付けの石や泥を固めたベッドもありました。高くて大きくて美しく、綿 (tūla) で覆ったものは禁止されていました。マットに相当する臥具 (sena) や坐具 (āsana) や枕 (bimbohana) は僧院の備品で、個人の所有物ではありません。部屋には敷物 (bhummattharaṇa) が敷かれている場合もありました。

座布団 (nisīdana) や、敷布 (santhata) などの布製品は自前です。敷き具は草で作ることも許されていました (tiṇasanthāraka)。2人で一つの器具や敷き布を使い回しすることは禁止されていましたから、必要品は各自が持っていました。寒い場合の掛け布団としては自分の重衣が使われました。重衣は2枚重ねに作られています。蚊帳も許されています。

部屋には痰壺 (kheḷamallaka) が置いてあり、灯明を置く棚がありました。蛇が落ちてくるのを防ぐために天蓋を吊ってもよいことになっていました。部屋の中に竹 (cīvaravaṃsa) や縄 (cīvararajju) が渡してあり、衣を懸けました。鉢はベッドや椅子の下に置きました。

#### [6] 陳棄薬

陳棄薬は牛の尿を醗酵させて作った薬とされていますが、よく分かっていません。

日常生活での「薬」の概念は栄養価の高いもので、バターとかチーズ、蜂蜜、砂糖、時には肉などでした。医食同源ということです。日常は在家信者が供養してくれるものを食べるだけで、注文はできません。しかし病気の時は、薬として注文することが許されていました。また食べ物は午後は食べることができず、保存もできませんが、薬としてなら午後にでも食べることができ、保存もできました。バター、チーズ、油、蜂蜜、砂糖などは「7日薬」として、7日以内なら蓄えて、非時（午後あるいは夜）にでも食べてよいことになっています。7日くらい続けて食べないと回復しないからです。

もちろん樹木の根や葉や実や樹脂などから作ったいわゆる「生薬」も認められていました。怪我をしたときや皮膚病のなどのための「外用薬」もありました。これらは一生涯蓄え、いつ服用・使用してもよいことになっていました。

#### [7] 1日の生活の時間帯

生野善応という方の『ビルマ仏教—その実態と修行』（大蔵出版）という本では、早朝日の出前に起床、掃除などの作務をしてから粥などの補助朝食をとって、午前中は托鉢あるいは勉強（講義と独習）、正午前に食事をして、午後1時間くらい休息（昼寝）、その後水浴して、午後は独習および自由時間、夕方講義があって、初夜に勤行、夜は独習と就寝、ということになっています (p.108)。

在家信者は食事の接待のために午前中にお寺を訪問することはありましたが、教えを受けるのは午後の時間帯です。

#### [8] 修行

その頃は文字に書かれた経典はありませんでした。したがって経典を読むということはありません。全て「耳学問」でした。例えば「色は無常なり (rūpaṃ aniccaṃ)」という句などを繰り返して唱えて覚えます。また説法 (uddesa) ・問義 (paripucchā) ・訓戒 (ovāda) ・教義を教

えること（anusāsani）なども行われました。原則として、お釈迦様の説かれた言葉をそれぞれの「如是我聞」として嘯みしめあったのではないかと思います。こうして経典は後世に伝えられたのです。

もちろん坐禅は日課だったと思います。

#### 【4】サンガの行事その他

##### [1] 毎月の行事

月に2回、満月と新月の日に布薩（uposatha）が行われました。半月間に戒律に違反することがなかったかどうかを確認する会でした。

時間は決められていませんが、午後に行くことが多かったものと思います。時には皆で午前中に食事をして、午後から布薩を行うこともありました。

布薩を行う日は、長老が明日あるいは今日行うぞと宣言することによって決まりました。きちんとしたカレンダーというものがなかったからです。布薩は同一の界に住している出家者の全員が一つの僧院の広間あるいは中庭に集合して行われました。「界（sīmā）」はお寺を中心としたお坊さんたちの縄張り、一つの村（居住区域と周辺の農地）を想像すればよいのではないかと思います。布薩は全員が出席しないと成立しませんでしたから、欠席する時には必ず委任状を送らなければなりません。阿蘭若に住する者も界を同じくする場合は、出席しなければなりません。しかし界の外にある場合は、一人でも2人でも独自に行うことができました。時によると夜までかかることがありましたから、灯の準備もされておりました。

比丘尼の布薩は別に行われましたが、比丘に指導されなければなりません。比丘尼サンガは独立して存在できず、比丘サンガに付属していました。南方仏教圏では後には比丘尼サンガはなくなりました。

##### [2] 毎年の行事

雨期には雨安居が行われますが、これは後で申し上げます。

雨安居の最後には「自恣じし」があり、その後に迦絺那衣かちなえという期間がありますが、これもその時に申し上げます。

雨期が終わると「遊行ゆぎょう」に出なければならないという決まりでした。この「遊行」についても後に申し上げます。

##### [3] 比丘と比丘尼の関係

比丘尼は比丘に従属する形で、存在が許されていました。その作法も細かく定められていますが、これについては省略させていただきます。

#### 【5】雨期（vassāvāsa）の生活

##### [1] 雨安居の制が定められた理由

お釈迦様の活動されたガンジス河流域地方では、7、8、9の3カ月に集中して大量の雨が降ります。その他の季節にはほとんど雨は降りません。（『理科年表 平成11年 1999』版の「世界各地の平均降水量（mm）」）

月	Peshawar	New Delhi	Allahabad	Calcutta	Bombay	Machilipatnam	Madras
1月	25.5	16.7	17.4	15.1	0.8	5.4	27.1
2月	43.9	19.3	13.9	24.2	0.8	10.4	4.2
3月	84.2	15.2	8.6	32.8	0.3	9.4	5.5
4月	48.0	14.7	7.7	56.4	1.6	9.3	11.1
5月	26.3	23.8	14.2	123.5	8.9	28.4	28.7
6月	7.9	68.6	82.8	291.7	581.3	94.3	61.9
7月	43.1	225.0	278.3	374.9	701.0	184.2	128.2
8月	70.0	254.2	261.7	345.7	459.4	173.8	156.4
9月	17.9	124.5	208.6	295.9	268.8	167.5	142.2
10月	10.8	16.5	34.9	133.4	55.5	186.6	282.9
11月	13.4	6.3	10.3	23.2	16.3	121.2	373.0
12月	22.9	11.1	4.3	12.3	4.3	25.0	154.4
年	413.9	795.9	942.7	1729.1	2099.0	1015.5	1375.6

この期間に動き回ると萌え出でようとする草木を踏み倒し、そこに生活する小動物を踏み殺す危険性があるので、この期間は歩き回ってはならないと定められました。雨に打たれると健康に悪いですし、釈尊の活動したヒンドゥスタン平野は北のヒマラヤ山脈と南のデカン高原の間に挟まれたお盆のような地形ですから、一帯が湖ようになってしまって道路が遮断されるという状態にもなったからであろうと思います。ですからインドの宗教者たちは、この期間は遊行に出ないという習慣でした。仏教もこの習慣を踏襲したのです。

## [2] 雨安居の期間

雨安居は中国の暦で4月16日から7月15日までか、あるいは5月16日から8月15日までの3ヶ月間と定められていました。今の暦では、7～9月か、8～10月かになります。前者を前安居（*purimikā vassupanāyikā*）、後者を後安居（*pacchimā vassupanāyikā*）といいます。

多くは前安居が過ぎましたが、入ろうとしても入れなかったというような特別な事情があるときには後安居も許されました。しかし多くの場合は、前後両方の4ヶ月間の安居を過ぎたのではないかと思います。

## [3] 雨期の食料事情

雨期は米や麦など主食穀物の収穫の端境期にあり、また多くの田畑が水没するので、概して食

料の少ない時期でした。飢饉も珍しくありませんでした（例えばVerañjā、あるいは入滅直前のVesāli）。したがって比丘たちはこの期間の食の確保には苦勞したと思います。また行動の自由も制限されておりましたので、比丘たちにとっては遊行よりも生活しにくく、したがって雨安居が終わった後に設けられた迦絺那衣（kaṭhina）は、そのご褒美のような意味を持っておりました。

\*現在インドの作付け面積の5/6を米・小麦・雑穀類が占める。米は二毛作で、小麦には秋播性小麦（冬小麦）と春播性小麦（春小麦）がある。しかし雨期中に収穫されるものはない。

#### [4] いづろ安居地に入ったか

雨安居に入るためには精舎の整備や雨期衣（vassika-sāṭikā）の製作（雨安居に入る1ヶ月以上前に布地を求め、15日以上前に作成することは禁じられていました）、あるいは3ヶ月間の食事を確保する目処をつけるなどの準備が必要でしたから、7月の初めに雨安居に入る仏弟子たちは、少なくとも半月前の6月中旬頃には、雨安居を過す予定の町や村に入ったと思います。

ただし釈尊の場合は2ヶ月くらい前に到着されたのではないかと思います。全国の弟子たちが雨安居に入る前に、雨安居期間中の修行に関する指導を受けに来るので（春の大会）、釈尊が動き回って所在が確定しないのは困るからです。

雨期に入る前の4、5、6月のガンジス河周辺の気候は酷暑期であって、平均気温は摂氏30度を超えます。最高気温が40度を超えることは珍しくありません。日本人が経営するホテルなどはこの期間は閉鎖されます。要するに旅行には不向きな時期ですから、この期間に遊行する者は雨期明けの遊行より少なかったかもしれません。しかし現在のジャイナ教のサドゥーたちはこの時期に遊行するということであり、釈尊時代にもなされたものと思います。（『理科年表 平成14年 2002』版の「世界の気温の月別平年値（℃）」）

月	Peshawar	New Delhi	Calcutta	Bombay	Madras
1月	11.3	14.2	20.0	24.6	24.8
2月	13.1	16.9	23.1	24.9	26.4
3月	17.4	22.3	27.7	26.9	28.4
4月	23.6	28.6	30.2	28.7	30.9
5月	29.1	32.7	30.7	30.3	32.8
6月	33.0	33.4	30.2	29.2	32.3
7月	32.0	30.9	29.3	27.7	30.7
8月	30.9	29.9	29.1	27.4	30.1
9月	29.0	29.4	29.1	27.7	29.7
10月	23.7	26.1	28.1	28.7	28.2
11月	17.8	20.6	24.9	28.2	26.3
12月	12.9	15.5	20.9	26.3	25.1
年	22.8	25.0	27.0	27.5	28.8

#### [5] 雨安居地の決定

釈尊の雨安居地は少なくとも前の年には決定していたものと思います。そしてこの情報が全国の弟子たちに口伝えに伝えられたのです。例えばヴェーサーリーの誰かが、来年の雨安居はヴェーサーリーでお過ごし下さいと願い、それが承諾されるというような形で決定されたわけです。時には2、3年前の雨安居の予約が入っている場合もありました。給孤独長者が舎衛城に雨安居を招待したときがそうでした。舍利弗・目連や大迦葉などの有力な仏弟子も同様であったろうと思います。

しかし普通の比丘たちには、3カ月の間継続して毎日、村の一定の人々に食物の供給を任ねられる安居地の確保は大変であったと思います。したがって地縁・血縁があったり、知己・友人のいる町や村で雨安居に入らざるを得なかったのではないのでしょうか。必然的に何年かの周期でいくつかの雨安居地を回るということになったのではないかと思います。突然見ず知らずの土地を訪問して、そのまま雨安居に入るということはなかったと思います。そこで安居を約束してそれを破ることは戒められておりました（突吉羅罪）。

#### [6] いつごろ安居地を出たか

雨安居が終わる最後の日、すなわち前安居ですと古代中国の暦で7月15日、後安居ですと8月15日になりますが、「自恣じし」という雨安居中の生活を反省する会があり、これで雨安居が終了します。日本で行われているお盆はこの自恣の日に由来します。お盆は自恣の日に餓鬼に布施をするという風習ですが、釈尊時代のインドや南方仏教ではお盆というものはありません。

その後に迦絺那衣 (kathina) の期間が設けられておりました。雨安居のご褒美として布地が布施され、これを衣に仕立てて衣替えし、遊行生活の準備をする期間です。今のように豊かな経済状態ではなかったので布地が得られないで、衣更えをしようにもできないということもあり、この期間として最大限5ヶ月間が認められておりました。

雨安居を終了して遊行に出る前には、雨期に破損した僧院を修復するという作業もありました。もちろんお坊さんがやるわけではなく、仕事はお坊さんの監督の元に在家信者がします。

また前安居を終わって自恣を済まし、迦絺那衣を捨てれば、その日にでも遊行に出られましたが、多くの場合はサンガとしての集団行動ですし、後安居を過している比丘もあり、雨安居中は部屋を割り当てられているということもあり、その僧院に出入りするのには迷惑ですから、後安居期間中の遊行は遠慮されたのではないかと思います。そこで結果的に4ヶ月間の雨安居を過ごす場合が多かったのではないかと思います。

したがって規則があったわけではありませんが、後安居が終わって、半月ほどしてから遊行に出るのが普通であったのではないかと思います。

この遊行は、仏弟子たちにとっては雨安居の修行の成果を釈尊に報告に行くことが主な目的でした。これを漢訳の仏典では「夏の大会」と言っています。その時釈尊は雨安居地を出られてどこに行かれたか分からないようだと困りますから、釈尊は夏の大会が終わる頃までは、雨安居地に止まられたのではないかと思います。

すなわち釈尊は雨期の後3カ月ほど雨安居を過された土地に止まれ、弟子たちと接見された後、現在の2月の初めに次の雨安居地に向けて遊行に出発され、3ヶ月間後の4月末ころに次の雨安居地に到着されたのではないかと思います。昔の中国の暦でいうと11月中旬ころから2

月中旬ころまでということになります。これは『涅槃經 (Mahāparinibbāna-suttanta)』が描く釈尊が亡くなる直前の遊行にびたりと一致します。釈尊は中国の暦の11月中旬に、ヴェーサーリーを出発されるにあたって3ヶ月後に入滅することを予告され、3ヶ月後の2月15日に目的地のクシナーラーに到着されて、そこで入滅されたのです。

要するに釈尊と弟子たちの動きとは正反対になるということです。比丘たちが遊行に出る期間は、釈尊は一定個所に止まっておられましたし、比丘たちが止まっているときには釈尊が動かれて、比丘たちの元を訪問されたわけです。

#### [7] 雨安居が過ごされた場所

普通は僧院だったでしょうが、洞窟とか民家の片隅にある牛小屋、あるいは特殊なケースとして隊商や船のなかということもありました。露地、樹の洞、納屍堂、傘蓋の下、土管、ベッドがないところなどで雨安居を過ごすことは禁止されておりました。それでは雨を防ぎ、寒暑を防げないからです。

#### [8] 雨安居の生活

普通の生活と変わることはなかったと思いますが、この期間は特別の事情がないかぎり、一定の居住範囲（これを界 *sīmā* という）から出ることが禁止されていました。盗賊の難を避けて村 (*gāma*) が移るようなときには、村の移動にしたがって移動することは許されています。

食料事情も悪いし、気候も悪いので、比丘たちにとっては一番生活しにくい時期だったのではないかと思います。しかしまとまった時間の取れる期間だったので、修行や勉強には最適でした。

情報の伝達手段が未発達な当時ですから、釈尊の教えを全ての出家者に伝え、周知徹底させることは大変なことでした。特に「戒律」は犯罪が起きたときにその都度制定されたもので、最初から法体系ができ上がっていたわけではありません。ですから随犯随制された法律を周知徹底させる必要があります。遊行によって各地の比丘に伝達され、布薩によって周知されたわけですが、雨安居の期間はそれを徹底させる絶好の機会となっていたのではないかと思います。

もちろん釈尊と一緒に安居を過ごすことが仏弟子たちの最高の願いだったでしょうが、誰にでも、いつでもかなうというものではありませんでした。一ヶ所に過剰な人数の比丘が雨安居することは、町や村の経済や生活を圧迫するので、そういうことは避けられたと思います。

#### [9] 集団生活か個人生活か

比丘たちは普通、一人の和尚（阿闍梨）と数人の弟子で一つのサンガを形成していました。平均して7、8人というところではなかったかと思います。和尚は出家して以来の師匠であり、阿闍梨は何らかの事情でその後に師匠となった人です。出家した比丘は少なくとも10年間（優秀な者は5年間）は師匠と同住しなければならないことになっていました。しかし10年を過ぎたから独立しなければならないというものでもありませんでした。とって一人の比丘が指導できないほどのたくさんの弟子をとることも戒められていました。したがってサンガの人数はこのくらいではなかったかと想像するのです。このほかに見習い出家修行者としての沙弥が数人従っていました。

サンガは生活の一つの単位で、安居も普通はこの単位でなされたものではないかと思います。

しかし阿蘭若住者と呼ばれるただ一人で修行する比丘もあり、このような人は一人で安居を過しました。

しかし釈尊の場合は、たくさんの比丘たちが慕って集まってきますから、数十人にはなったでしょうし、あるいは100人を超えることもあったかもしれません。しかし経典がいう、常時500人とか、1,250人の比丘に囲まれていたというのは大袈裟です。阿難はいつも釈尊のそばに居りましたが、この人は秘書室長というような役割で、身の回りの世話はもっと若い侍者が交替で勤めました。数十人の出家集団の生活（衣食住の全て）を3カ月間にわたって世話するという事は、小さな村ではできません。したがって釈尊の雨安居を過される場所は勢い、舎衛城や王舎城、あるいはヴェーサーリーやベナレスなどの大都会になったと思います。阿難と2人で過ごされたこともあります、これは飢饉という特殊事情にあった年です。

その他の十大弟子といわれる人たちは、別のところで釈尊のと同じような形で雨安居を過したと思います。

## 【6】遊行（長期の cārika）の生活

### [1] 遊行が定められた理由

あるとき、雨安居が終わっても釈尊がどこにも出かけられなかったので、世間から仏教の沙門には四方に道がないがごとくであるという非難が起こって、そこで雨安居を終えたら遊行に出なければならぬと定められました。

当時の沙門は遊行者（pabbajita）とも呼ばれたように、遊行するのが風習になっていました。その風習にしたがったものです。ヒンドゥー教の四住期の最後の「遊行期」との先後関係はわかりません。いずれにしろ「出家」は世俗のしがらみから逃れるという目的があるのですから、一ヶ所に定住することはまずいということになります。

ただし釈尊教団の最初の頃は、むしろ今のヒンドゥー教のサドゥーたちのように、一人ひとりが独立する形で、仙人村のようなものを作って生活していたのではないかと思います。ベナレス近郊の鹿野苑が「仙人墮処（Isipatana 仙人たちが集まる場所）」と呼ばれるところに示されています。このころは布教ということには余り重きが置かれなかったのです。

しかし釈尊は後に「2人していくな、一人で行け。法を説いて梵行を示せ」と諸国に出かけて法を説くことを勧められました。布教が実を結んで弟子たちがたくさんできると、弟子が弟子を指導するという体制がとられました。そこでサンガが成立したわけです。

### [2] 遊行の目的

釈尊の場合は道中に人々に法を説きながら、次の雨安居地に移動することが目的でした。

仏弟子の場合は、釈尊や高僧たちを訪ねて指導を受けるとともに、次の雨安居地に移動することが目的でした。後には釈尊の誕生地などの聖地を巡拝するという目的も加わりました。

また釈尊の定められた法律や説かれた教えを比丘たちが相互に伝達しあい、また次の釈尊の雨安居地情報などを交換するという機能も備えていました。

### [3] 遊行はどの時期に行われたか

雨期の遊行は禁じられていましたが、雨期以外のいつ遊行に出なければならないという規則はありませんでした。

しかし多くの場合は、前安居と後安居を終了した後に出るのが普通であったと思います。大体今の11月中旬くらいからで、気候的には遊行にもっとも適した時期です。これは雨安居期間中の修行の成果を釈尊に報告して印可を求めるのが主な目的でした。これが「夏の大会」です。

大会にはもう一つありました。雨安居に入る前に釈尊に会いに集まり、雨安居に入るについての教えを受けるための「春の大会」です。

このほかの季節にも仏弟子たちは自由に遊行に出ました。1、2週間の短期の遊行は随意になされたと思います。

釈尊は「夏の大会」と「春の大会」には、弟子たちの訪問を受けられたので、逆にこの時期には一ヶ所に止まっておられました。したがって釈尊の遊行期間は、「夏の大会」と「春の大会」に挟まれた、今の暦でいうと2月から4月にかけての3ヶ月間でした。

### [4] 遊行の交通手段

原則としては徒歩だったと思います。雌牛の引く車やその背中に乗ることは禁止されていましたが、牡牛の引く車や手で引く車、輿や籠などに乗ることは許されていました。しかし病者を除いては、奨励されていたわけではありません。比丘尼には病気の時以外は一切の車に乗ることは許されていませんでした。

釈尊が船に乗られたという記述は一つもありません。しかしガンジス河などの河を横切るときなどは、船に乗られたと思います。神通力で空を飛んで渡ったともされていますが、そういうことはあり得ないと思います。もっともガンジス河でも、乾期には泳いで渡れるくらいの水量しかありません。

河を上り下りする船に乗ったり、キャラバン隊に同道することなども許されていました。当時は猛獣や盗賊の危険があり、それを避けるためでもありました。特に比丘尼の場合は、一人で危険な場所を遊行することは禁止されています。

### [5] 宿泊場所

普通は僧院でした。寺院の土地・建造物などの固定資産は四方サンガに所有権があり、全ての比丘の共有物でしたから、比丘ならどこの、どの寺にでも、いつでも宿泊する権利を有していました。「律蔵」にはこういうことを想定して、遊行で寺を訪問する客比丘、それを受け入れる旧住比丘の規則が細かく定められています。

当然ながら、僧院のない場所に泊まらなければならない場合もあって、そのようなときには園林（樹下）、宿屋、民家、王宮などにも宿泊しました。

### [6] 遊行の人数

釈尊は多くの弟子たちと一緒に遊行されました。しかしせいぜい数十人だと思います。仏弟子たちは和尚・阿闍梨と弟子数人が一緒に、数人の沙弥が加わっていました。総勢10人くらいではなかったでしょうか。

2、3人の場合も、1人の場合もありました。しかしこれはむしろ例外ではなかったかと思いません。

#### [7] 1日の遊行距離

出発時間、到着時間に規則はありません。夜明け前に出発して、夕方に目的地に到着するという日程なら、1日に40キロ、50キロも歩けたと思います。しかし遊行はそもそも商用などのように急ぎの旅ではありません。

釈尊の場合は、早朝に軽い食事をされてから、乞食のために村に入られ、坐禅をされたり弟子たちに法を説かれてから正午前に食事を取られて暫時休息され、もしお呼ばれたような場合は、食後に在家信者に法を説かれてから出発されたのではないかと思います。

そして夕方暗くなる前には目的地に到着するという配慮がなされたと思います。当時のことですから夜になると真っ暗になりますし、僧院に宿泊する場合は、宿泊先の長老に挨拶したり、部屋を割り当てられたり、水場やトイレの場所に案内されたり、その僧院の習慣を説明されたりする時間が必要です。

釈尊の遊行は今の2、3、4月頃ですから、そう日が長い時期ではありません。午後1時過ぎに出発して5時くらいには目的地に到着するというような日程ではなかったかと思いません。

歩き方は、前方下方に目を注ぎ、手を振ったり、きょろきょろしたりしないで、上品に歩きました。荷物も持っていますから、せいぜい時速4.5キロメートルくらいではなかったかと思いません。

持ち物は三衣一鉢と帯・剃刀・針と糸・水こし（八資具）で、これは持っていなければならないものですが、その他に座布団・敷布や水瓶などさまざまな身の回り用品の所持は許されていましたから、かなりの荷物になったと思います。傘蓋や杖は病気の者だけに許されました。鉢はかなり大きなもので、これらを肩紐（*aṃsa-vaddhaka*）のついた袋（*thavikā*）や籠（*kaṇḍolikā*）に入れ、肩から下げたり、頭に載せたり、腰に括りつけたり、手で持ったりして運びました。棒にくくりつけて担うことも許されていました。しかし天秤棒のように両方に担うことは禁じられてました。

以上のように考えると、釈尊の1日に歩く時間は平均して3時間、歩く早さは早い目に見積もっても時速4.5キロメートルですから、1日に歩く距離はせいぜい13、4キロメートルくらいのものでなかったかと思いません。

遊行は次の雨安居地に行くためでもありましたが、旅先で出会う比丘たちや人々を導く機会でもあり、したがって一ヶ所に2、3日居続けられるということもあったと思います。方々からお呼びがかかって、寄り道・回り道をされることもありました。そこで1日の遊行の距離は平均すると、大体1由旬くらいであったと思います。1由旬は11.5キロメートルくらいに相当します。

しかし仏弟子たちの場合は、寄り道・回り道の機会は少なかったでしょうから、もう少しスピードは速かったかもしれません。

#### [8] 遊行期間と移動距離

5、6日で元の場所に帰るといった短い遊行もありましたが、次の雨安居地に移動するという場合は、必然的に長期間・長距離を遊行することになりました。仏弟子たちの場合は、ある場所から

釈尊のところによって、さらに別の場所に遊行するというケースがあり、かなりの距離になる場合もあったと思います。しかし長くても2カ月でした。原始聖典には「1月遊行」「2月遊行」という言葉はありますが、「3月遊行」という言葉はありません。

釈尊の場合は、比較的ゆったりした日程でありましたから、3カ月くらいかかる場合もあったと思います。

マガダ国の首都王舎城とコーサラ国の首都舎衛城の間は現在の道路距離で、ヴェーサーリー経由の場合は585km、バーラーナシー経由の場合は649kmです。649キロメートルを1日に歩く平均距離11.5キロメートルで割ると56.43日となり、ほぼ2ヶ月間となります。釈尊が遊行が使われた期間は3ヶ月ですから、この間に王舎城と舎衛城の往復はできません。経典からは釈尊は、それこそ神通力を使われて目まぐるしく動き回られていたというような印象を受けますが、実は釈尊はガンジス河の流れのように、ゆったりとして生活をされていたのではないかと思います。

ちなみにヴァッジ国の首都ヴェーサーリーと、釈尊が入滅されたクシナーラー間は188kmで16日間の距離です。ところが入滅直前の釈尊は、この距離を90日間もかかって遊行されました。80歳の老齢になられたうえに、出発直前に死に近い病気をされた後でありましたから、相当弱られていたのだと思います。

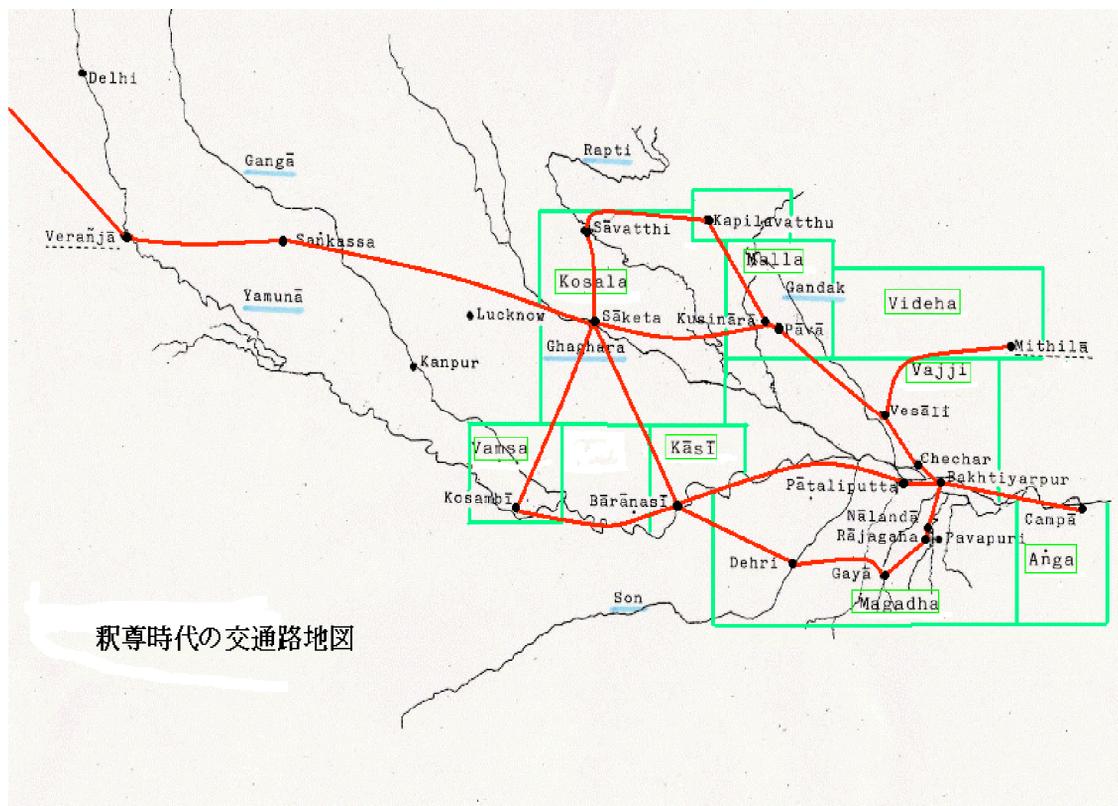
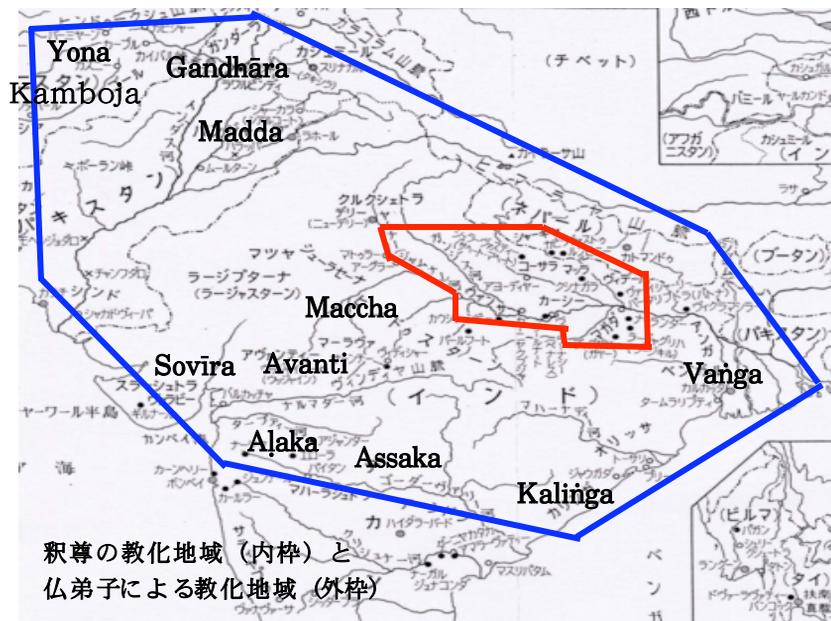
#### [9] 遊行中の生活

基本的には普段の生活と変りなかったでしょうが、遊行という要素が加わるので、午前中は普段の生活のように食事や修行、雑務をこなし、昼食を食べてから出発したのではないかと思います。

しかし遊行中には食事が得られないという恐れもあるので、普段は貯蓄は許されませんが、曠野を遊行するときには、道路糧（pātheyya）を携帯することも許されました。

#### [10] 遊行の経路

釈尊ご自身はガンジス河一帯から離れられたことはありませんでした（資料参照）。しかし弟子たちは西は現在のパキスタンや東はベンガル、南はデカン高原の中部まで布教していました。道中では乞食して食を得なければなりませんから、なるべく多くの人々が住んでいる町や村をたどって遊行したのだと思います。それを結べば、当時の主要交通路（通商路）が描けると思います。それがここに掲げた地図です（資料参照）。



【7】 釈尊と弟子たちの生活周期（おおよその目処）

上述の釈尊と弟子たちの生活形態を、普段の生活、雨期の生活、遊行の生活の3つと、釈尊と仏弟子に分けて暦の上で区切ってみると、次のようになるのではないかと思います。これはあく

までも平均的な見当を示したものです。

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
仏弟子	前安居の場合	安居の準備											
		安 居											
		迦絺那衣											
		夏の遊行											
		普段の生活											
		春の遊行											
	後安居の場合	安居の準備											
		安 居											
		迦絺那衣											
		夏の遊行											
		普段の生活											
		春の遊行											
釈尊	前後共通	安居の準備											
		安 居											
		迦絺那衣											
		普段の生活											
		遊 行											

## 【8】まとめ

釈尊は極めて合理的な世界観・人生観を持っておられました。したがってその教えは極めて合理的なものになりましたし、その生活も合理的なものでした。だから決して苦行的でもありませんし、まして神秘的でも、秘教的でもありません。

確かに出家の生活でしたから、世俗の生活とは同じではありませんでしたが、しかし当時の一般の人々の作った食事を食され、当時の一般の人々が着ていた衣料を使って僧衣を作り、当時の一般の人々が住んでいた素材や形式をもとにして作られた僧院に住んだのですから、釈尊もその弟子たちも一般の人々と異なる世界に住んでいたわけではありません。要するに、おそらくお坊さんも在家信者の人も、同じような着物を着、同じような食べ物を食べ、同じような家に住んでいたのではないかと思います。

ですから釈尊の生活を知るためには、当時の生活を知ることが一番です。もし当時の生活を知

ることができれば、釈尊の生活も正確に知りうるのではないかと思います。そのためには紀元前5世紀頃のインド人の生活を知る必要があります。決してたやすい作業ではないと思いますが、これについても努力していきたいと思っています。